What connects bonds

light

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｗｈａｔ　ｃｏｎｎｅｃｔｓ　ｂｏｎｄｓ

【Ｎコード】
Ｎ０４２４ＢＡ

【作者名】
ｌｉｇｈｔ

【あらすじ】
今の暮らしに違和感を感じている中学生、金森　陵は学校で不思議な体験をした。ある男に神子だと告げられ、異世界に連れ去られそうになった。ペンダントの力で男からは逃れることができたが異世界に飛んでしまった。陵は自分の正体をしるために異世界の人々と行動を開始した。
※この小説はｐｉｘｉｖでも書きました。（文章が少し変わってます。改良かもしれませんし、改悪かもしれません。）

プロローグ1

暖かい春の日差しが降り注ぐ中、制服を着た生徒たちが屋上で寛いでいた。

その中の一人、金森（かねもり）　陵（りょう）は空を見上げた。

真っ先に目に入ったのは青く澄み渡った空に浮く小さな雲。

その雲から視線をずらすと目も開けていられないような眩しさを持っている太陽。

視線を戻すと白色の大きな建物の一部が見えるだけ。

「何か・・・違うんだよな。」

何か、を上手く言い表す事は難しい。

それに相応しい言葉が出そうになっては引っ込んでいく。

俺はその何かを見つけたい。そう思っている。

だけど考えれば考えるほど分からなくなって混乱する。

だから、もう考えないことにしよう、と誓ったはずなのに・・・。

やはり気になってしまう。

どうすればこの違和感から逃れることが出来るのだろうか。

幼いころからの問いの答えは未だに出ない。
授業のチャイムが鳴ったのを合図にして俺はこの場を去った。

俺は教室へ戻るために廊下を歩いていた。
屋上なんかに行かなければ良かった。
俺は三年生だから教室は近いが、今の時間は理科室へ行かなければならなかったのだ。
どうしてこんなことを忘れていたんだろう。
そのまま直行できればよかったが残念なことに教科書は教室だ。
授業はもう始まっているだろうし・・・。仮病で保健室にでも行こうか・・・。
そう思い教室を通り過ぎて保健室へ向った。
他の教室の前を通った時に声がしなかったところをみると他のクラスも移動教室っぽいな。
じゃあ誰にも俺の姿を見咎められる事はないわけだ。
そう思って油断していたら思わぬところに伏兵がいた。

「そこのお兄さん。」

「・・・なんですか。」

考え事をしている最中に後ろから声を掛けられて振り向くと、そこには先生でもこの学校の生徒でもない小学生らしい少女がいた。

見たところ少女はまだ低学年くらいの可愛らしい容姿をしている。

だけど不思議だ。今日は月曜日だからこの少女も学校があるはずなのに。

俺が不思議そうに見ていると少女は嬉しそうに微笑んで近付いてきた。

「お兄さん、これ。」

少女が差し出したのは小さなペンダントだった。

「これは落し物なのか？だったら俺のじゃない。きっと他の人のだよ。」

そう答えると少女はクスクス笑って俺の手にペンダントを押し付けた。

少女が顔に似合わない不気味な微笑みを見せた。

それは子供の無邪気さとはまるで違う含みを持つ大人の微笑だった。

「いえ、これは貴方の落し物よ。忘れたの？」

少女はまるで俺と会ったことがあるかのように話しかけてきた。

仕方ないのでペンダントの形状を見直してみた。

ペンダントの先には宝石のような石が付けられていて高価そうな感じがした。

こんな高価そうなもの俺が持っているはずがない。

「・・・俺はこんなペンダント知らないよ。」

「嘘よ。これは貴方のものだもの。私は憶えてるんだから。」

「憶えてるって何を?」

思わずそう聞き返してしまった。少女が俺のことを知っているはずがないんだ。

だから答えられるはずがない。

「貴方のこと・・・。貴方の感じている違和感のこと。」

この少女は超能力を使えるとでも言うように俺の一番の悩みを言った。

少女はさらに俺に近付いて笑った。

「○○○○。」

少女が日本語とは違う言語で何かを告げた。
英語とも違う言語だったので俺には理解できなかった。
だが俺の頭の中を少女の言葉が駆け巡る。
今まで感じたことがないくらいに自分の中の何かが心の中で動き回っている。
どこかで聞いたことがあったかも知れない。
だけどそれがどこでかは思い出せなかった。
「・・・それは・・・・・・。」
少女がまたクスクスと笑いながら、俺の頭に手を当てた。
その笑い声は俺を恐怖に陥れるには十分な不気味さを持っていた。
「忠告しといてあげるわ。貴方はじきに連れ去られる。この世界とは違う場所に。」
俺の頭は真っ白になった。もしかしたら告げられた言葉は冗談かもしれない。
だけど、このときの状況はありえないことを信じさせるには十分な雰囲気を持っていた。
思わず持たされていたペンダントを強く握った。

「この世界とは違う場所・・・？それって・・・・。」

俺は何を聞こうとしていたのか・・・・。

全てを言い終わる前に激しい頭痛がして、その場にしゃがみこむ。

いくつかの映像と音声が頭の中を巡る。

『私の可愛いカール・・・・。』

女性が愛おしそうに子供を抱きしめている。

場所はどこかの小さな部屋だった。

『カール・・・カールっ！！』

必死に子供の名前を叫ぶ女性と赤子を乱暴に持つ兵士たち。

『お前は・・・・・・。」

兵士が少年に告げた言葉は肝心な所が抜けていた。

それを思い出そうとすると先ほどよりも強い頭痛が俺を襲う。

「・・・・・・っ・・・これは・・・？」

顔の・・・額の辺りが熱くなる。その部分に手を伸ばしたが特に異常はない。

それと同時に目の前が明るい光に包まれる。

その光の中で俺は何を見たのだろうか。

自然と涙が伝い俺の心を熱くする何か。

やがて、俺の意識は明光から暗闇の中に落ちていった。

「思い出してくれたかなぁ。そのペンダントにこめられた思い出を・・・。」

先ほどまでの不気味さが嘘のように少女は悲しげに微笑んだ。

その少女は陵の手に握られたままのペンダントを陵の首につけた。

「貴方が連れ去られたとき貴方が正しい道を歩めますように。」

少女は祈るように呟いた。

プロローグ2

目覚めるとそこは白いカーテンで包まれた部屋だった。

少し考えてここが保健室だとは判ったのだが、どうして俺が保健室にいるのか分からない。

俺、どうしたんだっけ・・・？

勢い良く上半身を起こして、カーテンに向って手を伸ばす。

伸ばした指が冷たい布を救い上げる前に別の存在によってカーテンが開けられた。

そこに居たのは日野坂（ひのさか）と書かれたプレートを胸につけた女性だった。

この女性は保険医で、多分だけど何かがあった俺を保健室で休ませてくれてたんだろう。

日野坂先生は優しそうに微笑んで俺の額に添えた。

「大丈夫そうね。廊下で倒れていたときはビックリしたわよ。本当に意識もなかったから。」

そうか、俺は倒れていたのか・・・。

不思議そうな顔をする俺に気付いたのか日野坂先生は、そのときの状況を説明しだした。

「えっと・・・金森君は保健室近くの廊下に倒れていて私が見つけたの。怪我とかは無いみたいだし、熱も無かったから保健室のベッドに寝かせておいたの。」

保健室近くの廊下・・・か。そこで何が起こったんだろう。

自分のことなのに思い出せない。また心のモヤモヤが増えた。

「すいません。何も思い出せません。」

「いいのよ。それで今日はどうする。授業に戻るか家に帰るか好きなほうを選んで。」

「じゃあ授業に戻ります。」

こんな元気な状態で帰っても暇だろうしな。

俺は日野坂先生にお礼を言って保健室を後にした。

陵のことを気遣っていた日野坂は一人になってから呟いた。

「あの子・・・。寝言で帰りたいって言ってたけど本当は家に帰りたかったのかしら？」

日野坂はその言葉の意味を理解できただろうか。いや・・・できなかっただろう。

「でも、夢と現実は違うわよね。」

日野坂は自分の考えが間違っていた、と言うように頭を振った。

教室へ戻る前に時計を見た。時計は１１時３２分を示していた。

「まだ４時限目は始まってないんだな・・・。」

４時限目の授業はなんだったか考えながら頭を掻く。

そのまま首の後ろに手を当てると、指に硬く冷たいものが当たった。

俺は驚いてそれを指でたどった。

どうやらそれはペンダントのようで上手い具合に服の中に入り込んでいた。

「どうしてこんなものを・・・。」

そのペンダントは俺の知らないものだったが、どこかで見たような気もする。

ネックレスについている透明な丸い石がまるで宝石のように見えた。

どこか高価そうな雰囲気を漂わせる宝石のような石が俺の手の中で輝いた。

こんな高価そうなペンダントを俺が持っているはずがない。

そもそも俺は学校にペンダントを付けて来たことなんてないんだ。

「このペンダントは・・・。」

どこで買ったんだろう・・・。誰に貰ったんだろう・・・。

記憶の糸を辿っていくが答えは出ない。

とりあえず校則違反になるから外そうとペンダントに手をかけた。

ペンダントに触れた瞬間、俺の視界が歪んだ気がする。

いきなりで思わずペンダントから手を離してしまった。

それはほんの一瞬で確認する事は不可能だと思われた。

眩暈・・・かな・・・？まさか倒れた原因・・・？それとも倒れたときに頭でも強く打ったか・・・？

俺は頭を押さえた。一応、こぶはできていないようだ。

気を取り直して再びペンダントに触れる。もう先ほどのような眩暈は起きなかった。

ペンダントをそのまま外して蛍光灯にかざしてみた。

「綺麗だな・・・。」

光り輝く石に気をとられ思わず呟いた。

それと同時に近くを事務の先生が走って通り過ぎていくのを見た。

タイミングが良すぎた。俺はペンダントを見られていないか不安になってしまった。

だが立ち止まらなかったところを見ると気づかれてはいないようだ。

それにしても少し急ぎすぎじゃないだろうか。

時計を見ると１１時３８分。授業開始まであと2分を切っている。

ああ、授業か・・・。と納得すると同時に階段へ向った。

ペンダントを急いでポケットにしまいながら歩いていると後ろから誰かの視線を感じてふり返る。

だがそこには誰もいなく、勘違いか・・・と再び教室に向って歩き始めた。

「あの子、結構勘が良さそうね。私たちの気配に一瞬だけど気付いた。」

「そうね。素質はあるみたいだから・・・。」

「そういえば、あんたの渡し方だけど・・・もうちょっとマシな方法はなかったの？」

「・・・悪い？久しぶりだったから・・・。」

「一応、記憶は消しておいたけど・・・。バレたら駄目なの分かっ

てる？」

「貴方には分からないわ。」

そう絶対に分からない・・・。この気持ちは当事者である自分にしか分からない・・・。

隠さなければいけない・・・。全てを・・・・・。

プロローグ3

教室に戻ると友達の佐藤（さとう）　渉（わたる）と中矢（なかや）　來（らい）が駆け寄ってきた。

二人とも驚いたような顔をしている。

「おい、もう大丈夫なのか？倒れてたって聞いて驚いたし、凄く心配してたんだぞ。」

今話しかけてきた、茶髪で元気そうなのが渉で、來は目を隠すほどに伸びた黒髪を揺らしながら頷いている。

「心配してくれてありがとう。俺も自分が倒れてたって聞いて驚いたよ。」

「・・・倒れたことに気付かなかったの・・・・・・？」

來が控えめに発言して首を傾げる。

どう説明したら良いのか分からなかったから曖昧な返事になってしまった。

「気付かなかったというか・・・。憶えてないっていうか・・・。」

「えっ！！憶えていないって大丈夫なのか？記憶喪失じゃないのか？」

その渉の言葉に來も心配そうな顔になる。

でも記憶喪失って全部の記憶が消えるんじゃなかったっけ？

「そんな大げさな・・・。ちょっと思い出せないだけだって。」

俺は笑って伝えたが、二人はまだ心配そうに俺を見ている。

どうすれば信じてもらえるんだろう。

「とにかく俺は大丈夫だから！チャイム鳴るし席に戻ろう。」

するとタイミングを見計らったようにチャイムが鳴って少し笑ってしまった。

席に着いて教科書を出していると、制服のポケットの部分から熱を感じた。

なんだろうと疑問に思うが熱源になるような物は持っていない。

気になってポケットに手を突っ込み中を漁る。

その中にあった丸い何かに手が触れた。その瞬間に頭に流れ込む文字。

『聖川（ひじりかわ）　大輔（だいすけ）。井坂（いさか）　夏喜（なつき）。斎藤（さいとう）　武（たけし）。河山（かわやま）　礼子（れいこ）。外浦（そとうら）　愛（あい）。百瀬（もせ）　竜也（たつや）。高野（たかの）　悟（さとる）。小林（こばやし）　美智子（みちこ）。坂本（さかもと）　彰浩（あつひこ）。』

流れ込んできたのは名前のようなもの。名前だとすると9人分で、どれも俺の知っている名前だった。

同じ部活の後輩たち、同じ委員会のメンバー、同じクラスの人など・

・・・。

あまり親しくない人も混ざっているが、俺は確実に知っている。

どうして、こんなことを思い出したんだ・・・？それに、この人たちに何の共通点があるんだ？

原因を探ろうと手に触れたものに、もう一度触れてみる。

だけど確かめようとしたとき、それは既に熱を失っていた。

さっきの名前は・・・。それに・・・あの感覚・・・。どこかで・・・・・？

いきなりガラッと大きな音がして思考を中断される。

入ってきたのは慌てた様子の先生だった。何かあったのだろうか。

チラッと俺のほうを見た気がしたが多分気のせいだろう。

先生は走ってきたのか汗だくで手に持っているハンカチで顔を拭いている。

「皆に伝えたいことがある。」

先生はいきなり改まってクラス全体に話しかけた。

皆はどうしたんだろうかと先生を見つめた。俺も不安になって先生のほうを見た。

「今日は午後の授業はない。さっきの休み時間に職員会議があって決まった。理由は生徒の数人が行方不明になったからだ。消えたのは1年生2人、2年生1人、3年生5人だ。この、8人は学校に外履きが残されたままだったから学校から出たかどうか怪しい。先生方で話し合った結果、皆は安全確保のため家に帰ってもらう。」

これを聞いて他の生徒からは幾つかの疑問が投げかけられたが、先生は何も答えなかった。

そして俺は疑問ではなく違和感を感じた。

8人か・・・。じゃあ俺の頭に浮かんだ名前とは関係がない・・・。

そういえば、最後に浮かんだ名前は『坂本　彰浩』で生徒の名前じゃない。

この名前は国語科の先生の名前だ。もしかしたら・・・坂本先生も消えていて、生徒じゃないから除外されているのかもしれない。

普段なら俺もこんなことを考えないだろう。だけど、胸騒ぎが消えないんだ。

もしかして先生は何かを隠してるんじゃないか・・・。

「それでは解散。あと、金森君は職員室に来るように。」

軽く返事をすると先生は安心したように走っていった。

先生はどうして俺を呼んだんだろうか。疑問ばかりが増えていってしまう。

だけど俺には疑問を解決する術がない。
だったら職員室へ行って坂本先生が消えたかどうか見たほうがいいだろう。
俺は言われたとおり職員室に向かった。

「なぁ、消えた人って誰なんだ？」
「さあ・・・。3年生のほうで確実なのは、このクラスの井坂　夏喜と河山　礼子だな。早退したと思ってたら、まさか消えたなんて・・・。」
「そういえば他のクラスにも早退したらしいって人がいたな・・・。」
クラスのざわめきは教室から人がいなくなるまで続いた。
その中には複数の名前が出てきたが、それの関連性を知っているのは、この世界で2人だけだった。

プロローグ4

職員室に入ると先生方が一斉にこちらを見て驚いた。

出入り口の近くでオドオドとしていると聞きなれた声が耳に届いた。

「金森君。こっちへ来てくれ。」

手を振られてその場所へ急ぐとそこに居たのは教室で俺を呼び出した先生ではなく、俺の予想をいい意味で裏切った坂本先生だった。

俺は安心して、今までの考えを打ち消した。

そして今更のように何で呼び出されたんだろうと考えてみた。

そんな俺をよそに坂本先生は衝撃的な言葉を発した。

「君が金森君だね？」

「いきなりなんですか、先生。俺をからかってるんですか？毎日学校で会ってるじゃないですか。」

そう言うと坂本先生は不気味に笑いながら何かを呟いた。

俺は坂本先生の呟きよりも笑い方に恐怖を覚えた。

どこかで同じように不気味な笑い方をした人を見なかっただろうか。

「君は理解していないだろうから教えてあげるよ。」

何を・・・と聞きかけて気付いた。

この人・・・そっくりだけど坂本先生じゃない・・・？

「私は君の言っている坂本という名前じゃないんだ。私の名前はアラン。普通にアランと呼んでくれればいい。あと・・・仲間からは水竜と呼ばれているよ。そして君が一番気になっているであろう消えた人たちは、この世界にはいない。」

嫌な予感が的中してしまい呆然となる。

この世界にはいない・・・。じゃあどこに居ると言うんだ？

「異世界。今回消えた人たちはそこに行ってもらっている。そして、そこから私と同じように入れ替わったものもいる。パラレルワールドってしってるかい？それみたいなものだよ。かなり違うけどね。」

意味が理解できない単語がいくつか出てきた。

だけど坂本先生の偽者であるアランは質問する時間をくれなかった。

「今回私たちが事を起こした理由は2つ。1つは間違ってこの世界に飛ばされた闇の神子を探すため。そしてもう1つは敵が飛ばした光の神子を殺すため。この世界には力を使うために必要な物が欠けていたから探すのが大変だったよ。その内の1人が君なんだ。」

アランの発言の衝撃が大きすぎて思考が止まりかける。

内容をよく考えてみると、この男がいとも簡単に恐ろしいことを口

にしていて驚いた。

アランの言っていることが本当だったら闇の神子の場合は生きてるからいいとして、光の神子の場合は殺されてしまうってことか・・・・。

そもそも闇の神子とか光の神子とか・・・いったい何なんだ？

俺が考え事をしているのに気付いたのかアランは俺の前に手を出した。

「こっちの世界にいるかぎり、どちらの神子か分からない。こちらの世界へついてきてもらおうか。」

「・・・なんで俺が神子だと分かるんだよ。闇か光かは知らないとして・・・。」

そう言うと男が愚問だとでも言いたそうに笑った。

馬鹿にされているようで頭にきたが今はそんなことをする場合じゃないようだ。

「それは秘密だよ。正確には俺も知らない。俺はボスから指令を受けて来ただけさ。可能性のある４人の名前を告げられてな。」

そこまで言うとアランも急に真剣な顔つきになった。

もう何も話す気はなさそうだ。

「それで、お前が持っているんだろ。時渡りのペンダント。あれが

移動に必要なキーアイテムなんだよ。」

アランのペンダントという言葉にハッとしてポケットに手を突っ込む。

そこに入っていたペンダントを引っ張り出す。透明だった石は赤色に輝いている。

俺は驚きで言葉を失い、アランは俺の動作を見てニヤッと唇に弧を描かせていた。

「そう、それだ。それは術者か製作者のどちらか一方の意志で移動する。それを私に貸しなさい。」

アランが腕を伸ばす。俺はどうすればいいのか分からなかった。

アランにこれを渡せば異世界に飛ばされる。渡さなかったところで無理やり奪われるだろう。

迷っていると本当にアランの手がペンダントを掴もうとして勢いで振り払ってしまった。

「金森君。君は頭のいい子だと聞いているよ。どうするのが一番いいのか分かるだろう。」

痛い目に合いたくなければさっさと渡せ、というところだろうか。

それは俺にも分かってる。

だけど・・・体といえば良いのか意思といえば良いのか、何かが俺

の中で叫んでいるんだ。このペンダントを渡してはいけない・・・と。

「あいにく俺は馬鹿でね。お前みたいに悪そうな奴にそんな物渡せるか。そもそも、その話が本当かどうか怪しいね。」

「・・・金森君。君は自分が何をしているのか分かっているのかい？」

アランは優しそうに微笑んだが目は笑っていなかった。

俺はその答えを口ではなく行動でしめした。

時渡りのペンダントを強く握り締め、アランを睨みつける。

アランに睨み返され少し後ずさりするが態度だけは変えなかった。

アランが片手を振り上げ俺の腹を勢いよく殴りつけた。

思ったよりも素早い攻撃に対処が遅れ、後ろに吹き飛ばされる。

あまりの衝撃に息が詰まった。苦しみに耐えながら、後ろの壁を利用して踏ん張る。

話の内容や殴ったことから他の先生が止めたりしないかと心で願ってみたが、職員室に他の人はいない。

辺りを見回している俺に気付いたのか、アランが嘲笑うかのように説明しだした。

「ここの先生方には少し乱暴でしたが私の力を見てもらいました。そうしたら大人しく言うことを聞いてくれました　よ。つまり君を助けようとする愚かな人間はこの部屋にはいないんだ。君にも少し見せてあげようかな。」

アランはポケットから青色に輝く石を取り出して振りかざした。

アランの言葉に従って徐々に輝きを増していく。

「石に込められし数多の精霊よ。我が呼びかけに応じ我が意のままに動け。」

アランの前に水の塊のような球が生まれた。

嫌な予感がして手を前にかざす。

その嫌な予感どおり球が俺めがけて飛んできた。

敵はまだ俺を殺せないだろう。だけど、光のほうの神子か普通の人間だったら殺されるんだろ。

俺はまだ死ぬわけにはいかない。頭に浮かんだイメージのまま叫ぶ。

「俺は・・・まだ死にたくない！！時渡りのペンダント、俺の意思に従いて渡せ。」

金色の輝きが俺の目の前に現れた。それは手に引っかかっていた時渡りの石からの光か、それとも・・・。

気付いたときには、光はすっかり消えていた。

闇に落ちながら懐かしい声を聴いた。

『無事に逃げ出してくれたのね。嬉しいわ。貴方はまだ自分の力に気付いていない。お願い・・・を・・・して。』

俺の力・・・？待って・・・よく聞こえない。誰を倒せば・・・・・・。

闇の中で託された言葉の意味も分からないまま、少年の意識は遠い彼方へ運ばれていった。

そこで待っているのは少年の知らない異郷の地、彼の意志に反して深まっていく悲しみと苦しみ・・・。

少年は無数にある可能性の中でどれを手にし、どれを捨て去るのだろうか・・・。

異世界での少年の旅が始まろうとしていた。

第1話　～最初の出会い～

あれからどれくらいの時間が経っただろうか。
陵は気がつくと冷たい土の上に倒れていた。
「ここは・・・異世界・・・・・・？」
辺りは豊かな自然が溢れていて明らかに学校付近の景色ではない。
すぐ近くに見える建物は木で作られていてコンクリートなどは一切見えない。
来てしまったんだな・・・と溜め息を付いてこれからどうするかを考えた。
とりあえず・・・いつでも戻れるように時渡りのペンダントの確認をしておこう。
陵はいつの間にか首に掛けられていたペンダントを外し宝石の部分を詳しく見た。
ペンダントは最初に見た時よりも輝いているように見えた。
「けっこう簡単に移動できたなぁ・・・。」
移動したときのことを思い返す。
あのときは無我夢中で・・・どうしてあの言葉が出てきたのか分か

らない。

『時渡りのペンダント、俺の意思に従いて渡せ。』

だけど・・・まだ俺が小さい時にどこかで聞いたことがあるような気がする。

いつだっただろうか・・・。小学生のとき・・・違う・・・・・・・・もっと前だ。

そこまでは分かるのにそれよりも前の記憶を思い出せない。

「あれ・・・。おかしいな・・・・・・・。俺・・・何も思い出せない。」

生まれてから数年の記憶が抜け落ちている。

あるのは小学2年生の秋ごろからの記憶だけで、最近の記憶も少し消えている。

どうして俺は今まで不思議に思わなかったのだろう・・・。

ペンダントを誰に貰ったのか。俺はどうして倒れていたのか。

大事な何かを忘れているようで大きな喪失感が生まれる。

俺は・・・俺の名前は・・・。

「アーティス!!」

突然聞こえた声が俺の思考を中断させた。
急いでペンダントを首に掛けなおす。
足音が陵に近づいてくる。
誰かに間違えられているのだろうか・・・。
異世界で初めて会う人なので緊張しながら次の言葉を待つ。
声のしたほうを見ると一人の少女が微笑みながら駆け寄ってくるのが分かった。
「アーティス、まだこんな所にいたの？忘れ物でもしたの？」
淡い金色の髪を風になびかせ、透き通るような水色の瞳が俺を見つめる。
会ったことのない少女に話しかけられて驚くが、どうにか冷静さを取り戻す。
「あの・・・人違いではありませんか？」
陵は不安げな表情を作って少女のほうを向いた。
少女は驚いたような表情をして何かを探るように陵を見つめた。
「ごめんなさい・・・。少し似ていたから・・・。」
少女は少し怯えるような顔をしたが、一瞬で消えて元の表情に戻っ

た。

陵はそんな少女に気付かず、普通に話しかけた。

「いえ・・・気にしてませんから。ところで・・・ここはどこでしょうか？道に迷ったんですけど・・・。」

「そうなんですか。ここはランディオール。ここへ来るまで何かありませんでしたか？」

少女が心配そうに聞いてくる。危険な場所なのだろうか。

「いや・・・特に何もなかったけど。それがどうかしたの？」

陵が不思議そうに聞き返すと少女は優しく微笑んだ。

少女が建物の立っているほうを指で示す。

「とにかく長老のところへ来てください。外からの来訪者は必ず連れて行かないといけません。」

少女が陵の腕を掴んだ。少女の手から人の温もりとは違う何かを感じた。

それを感じた瞬間に何かが俺の意識に入り込んできた。

前のときとは違う感じに不安を募らせるが、入り込んできたのは予想とは違う穏やかな物だった。

一枚の絵がまるで忘れていたものを取り戻すように自然に浮かんで

きた。

それは二人の子供が手を繋いで歩いている微笑ましいものだった。

その絵に映った子供・・・後姿だったけど・・・・・・。

「どうかしたんですか？早く行きましょう。」

それが何を示しているのか考える前に少女に思考を中断させられた。

陵は少女の顔を見てから建物のほうへ歩き出した。

それにしても必ず長老に挨拶をしなければいけないとは面倒なことになったかもな。

第2話　～疑い～

「しばらくここで待っていてください。」

そう少女に言われてから数十分は待たされている。

ここは村の一番奥にある家で、すぐそこに森の入り口があった。

この部屋の窓からもその森の入り口が見える。

森は村を囲むように広がっている。まるで外部からの侵入を防いでいるかのようだ。

『ここへ来るまで何かありませんでしたか？』

ふと少女の言葉を思い出す。確かに森を抜けるのは大変そうだ。

何か危険な動物でも出るのだろうか。

地球の森に出てくる危険な動物を想像して笑ってしまった。

この世界にも地球と同じような動物がいるのだろうか。

様々なことを考えていると、後ろから足音が聞こえてきた。すぐ近くで止まる。

「お待たせしました。私がこの村を治めているマリーです。」

陵が入ってきたのとは別のドアを開けて女性が2人の少年を後ろに

従えて入ってきた。

男性だと思っていたばかりに入ってきたのが女性で少し驚いた。

「さっそくですが、貴方はどのようにしてこの村に来たのですか？」

異世界から飛んできたらここでした、なんて言っても分からないだろうしな。

道に迷っていたら着いたことにしておけばいいのか・・・。

「えっと・・・道に迷って・・・・・・。」

「そんなはずはありません。この村の周囲には守り神の力で結界を作っています。入れるはずがありません。」

日常生活では聞きなれない単語に耳を疑う。

この村の周りには結界が張られているのか。

先ほどの少女が心配していたのは動物ではなく、結界のことだったのか。

「結界！？ちょ・・・ちょっと待ってください。」

嫌な予感がする。もしかしたら怪しまれているのかもしれない。

陵は立ち上がって声を荒げる。

「静かにしてください。あなたが質問に答えてくれなければ今すぐ

にでも・・・。」

マリーの後ろにいた少年が剣を握り陵の横に立った。

そのまま座れと指示する。陵は急いで椅子に座りなおした。

少年の剣が外からの日差しで眩しいくらいに輝く。

おそらく答えなければ殺されるのだろう。

「嘘・・・だろ。俺は気付いたらここにいただけだ！何も知らない。」

マリーの目が鋭く光る。それは俺の顔から徐々に下へ移動して止まった。

その視線の先には光を反射して鈍く輝くペンダントがあった。

マリーは俺の右にいたほうの兵士に何かを伝えた。

兵士が急いで部屋を出て行く。

もう一人の兵士は俺の後ろに立ち、剣を首の手前で止める。

「このペンダントは何？精霊の力を感じるけど・・・どこで手に入れたの？」

精霊の力・・・？

またよく分からない単語が出てくる。

そういえばこのペンダントは誰に貰ったのだろう・・・。

「知らないんだ!!本当だよ!!」

「知らない？嘘を言わないで。私の知らない精霊ね。どの精霊と契約を交わしたの？」

マリーは陵の言うことを信じずにペンダントについて詳しく聞いてくる。

この世界では普通の単語でも、異世界からやってきた陵にとっては特別な単語だ。

どの精霊って・・・どんな精霊があるんだよっ・・・・・・。

「本当に知らない。気付いたら持ってた。アランとかいう奴に殺されそうになって・・・・。」

陵はそこで言葉を止めた。

怖い顔で俺を睨みつけていたマリーの顔がみるみる青ざめていったからだ。

俺の首に剣を突きつけていた兵士も動揺しているように感じられた。

「今、アランと言ったわね。」

「・・・それがどうしたんだ。」

そういえばアランはこちらの世界の住人だった。
この世界の人が知っていたとしてもおかしくはない。
マリーの体は恐怖を感じてか震えている。
同じ名前の人が居たとしても恐怖の対象としては一致しているようだ。
「アラン・・・。ついに動き始めたのね・・・・・・。じゃあ、貴方は・・・。」
マリーが陵の顔を見る。先ほどまでの険しい顔は消えて戸惑いだけが残っている。
陵は何が起こっているのか分からずに、その様子を黙って見ている。
「貴方・・・名前は？」
急に名前を聞かれて陵は不思議そうに首を傾げる。
動くことを許さなかった剣が陵の首から離れていく。
マリーの指示で少年が剣を元の鞘におさめたのだ。
「俺の・・・名前は陵。金森　陵・・・・・・。」
マリーは少しの沈黙の後、やっとのことで言葉を紡いだ。
「そう・・・。さっきも言ったと思うけど私はマリー。この村の長

で唯一の精霊使いよ。」

急に自分のことを喋りだしたマリーに陵は不信感を隠せなかった。

「マリーさんは俺を疑ってたんですよね？どうして今更・・・。」

マリーは複雑そうな顔をして黙った。

長い沈黙のあとで少し口を開いたマリーが、ゆっくりと言葉を発する。

「私は貴方の敵ではありません。貴方が・・・・・・。」

「お呼びでしょうか、マリー様。」

マリーが言葉を発するのを躊躇ったとき、一人の男が部屋に入ってきた。

少し前に部屋を出て行った少年が遅れてマリーに挨拶をする。

「シルア、リエル、部屋に戻っていなさい。レティオ、実は・・・・・・。」

マリーが少年二人を部屋から追い出し先ほど入ってきた男に話しかける。

レティオが陵の顔を見ながら真剣そうに頷いている。

陵は二人の会話を聞き取ろうと耳を澄ますが何も聞こえない。

いくら声を潜めているとはいえ何も聞こえないのはおかしい。
陵は二人の顔を見ながら状況を把握しようと頑張ったが、その努力は報われなかった。
二人の会話は意外と早く終り、レティオと呼ばれた男が陵に近付いた。
「私の名前はレティオ。この村の医者だよ。君の名前は陵なんだね？」
レティオは屈強そうな外見とは全く違う優しそうな笑みで話しかけてきた。
陵はまた脅されると思っていたため驚き、慌てて首を縦に振る。
レティオが陵の頭をなでながら頷く。
「大丈夫だ。マリーは君たちの敵ではない。別の場所で詳しく説明しよう。ついて来い。」
「えっ・・・君たち・・・の？」
ここには俺一人しかいないため、その言葉に強い違和感を感じた。
「ああ、本当ならば光の神子と闇の神子・・・どちらも消してはいけないからね・・・・・。」
どうして俺が神子だと告げられたことを知っているのだろうか。

陵は少し警戒したがレティオに敵意がないことが分かり頷いた。

第3話　～精霊～

移動を始めてから僅か数分で目的の場所に着いたらしい。

レティオが村の外れにある小さな家の前で止まる。

「ここが今日からお前が生活する場所だ。すまないな、他に空き家がなくて。」

そう言ってレティオはドアを開けて中に入った。

続いて陵も家に入る。日本と違って靴は脱がなくてもいいようだ。

レティオが入ってすぐの部屋に入る。

その部屋はまるで最近まで誰かが使っていたように埃一つない。

「あの・・・この家って・・・・・・・。」

「ああ、最近まで他の人が住んでいた。だが・・・・・・・。」

レティオが陵の顔を見てから俯く。

もしかして・・・この家に住んでいたのってノエルの言っていたアーティスって人なのかな？

「いきなり旅に出ると言って皆の反対を押し切って出て行ったんだ。最終的には皆が納得した。理由があったからな。」

「理由・・・？」

「おっと話がずれたな。。さて・・・単刀直入に言おう。君は異世界から来たんだね？」

レティオの顔から笑顔が消える。

まるで先ほどのマリーのような真剣さを感じた。

だが自然とマリーのときのような恐怖は感じない。なぜだろうか。

「え・・・あ、はい。何でそれを・・・。」

「以前、この村で同じようなことが起きたからな。それに・・・そのペンダント。」

レティオの視線がペンダントに向く。

陵がペンダントを外してレティオに手渡した。

「やはり・・・・・。時空の精霊の力がこめられているな。それもかなり多くの・・・。」

「それってどういうことですか？」

聞きたい事は山ほどあった。

時空の精霊やアランという人物、そしてこの世界についての様々なこと。

レティオは分かっているとでも言うように説明を始めた。

「精霊とは物事が起きる際に働いている力を生み出す存在だ。常に身の回りにあるのが火の精霊・水の精霊・風の精霊・地の精霊の生み出す要素。要素とは力の源のことだ。場所によって区切られている精霊もあれば、時間によって区切られている精霊もある。光の精霊・闇の精霊、海の精霊・山の精霊・空の精霊・・・そして時空の精霊。」

陵は途中までは精霊ってたくさん種類があるんだな、と軽い気持ちで聞いていたが時空の精霊が出てきたことによって真剣になる。

「時空の精霊は二つの世界を繋ぐ重要な役割りを担っている。簡単に使役できるものではない。だがこのペンダントには複数の力を感じる。ああ、誤解のないように言っておくが精霊は一人ではない。いや・・・精霊は一人だが、精霊が生み出している力にも意思が宿り生きている。このペンダントには時空の精霊の生み出した多くの力がこめられている。・・・理解できたか？」

陵は入ってきた情報を整理しながら僅かに頷いた。

レティオが陵にペンダントを返す。

これに・・・時空の精霊の力が・・・・・・想像できないな。

陵はペンダントを装着しレティオの説明を待つ。

「時空の精霊は時空の狭間に存在している。その精霊を使役するくらい強力な力を持った奴が敵にいる・・・ということだ。お前の元に現れたアランが俺の知っている人物ならな。」

「アランって何者なんですか？どうして俺を・・・。神子って一体・・・・・？」

陵の口から疑問が幾つか飛び出る。

レティオはしばらく考えてから少しだけ答えてくれた。

「アランはこの世界の全てを支配する王国ネイティアの特別魔術師だ。ネイティアの支配者・・・国王については良く分からないが、プルートと呼ばれていたのを聞いた。」

『プルート』

その名前を聞いた途端に陵の体が動かなくなる。

まるで自分の体ではないような不思議な感じに襲われる。

それに気付いたレティオがふとペンダントを見ると先ほどよりも輝きが増していた。

「・・・違う・・・・・・。アイツは・・・違う。俺の知っているプルートじゃない！！」

自分でも何を言っているのか分からなかった。

だけどプルートの響きがどこか懐かしく感じられて・・・。

ペンダントから伝わる言葉が陵を突き動かす。

ペンダントが急速に輝きを失っていく。

「大丈夫か、陵。どうやら・・・そのペンダントにはまだ秘密があるようだな。他の精霊以外の意識が感じられる。・・・この気配・・・・・。先ほどの言葉は・・・その意識の言葉か。」

レティオが何かに気付き押し黙る。

陵が次に聞いたのは先ほどの会話とは全く違う内容だった。

「とにかく、お前は狙われている。気をつけてくれ。夜に娘を連れて来る。娘は料理が上手なんだ。」

レティオがこの家の構造を話し終わり玄関へ向う。

それを見送って最初の部屋に戻った。

「このペンダントの中に精霊が入ってたなんて・・・。」

今までの生活では絶対に信じなかったであろう事を素直に受け入れている事が不思議だ。

それに家族や友達とも会えなくなってしまったのに冷静で居る事が何よりも信じられない。

夢を見ているのと同じ感覚で非現実的なことが起きている。

「どうせなら・・・今までのこと全て夢だったらいいのに・・・・・・。」

陵は溜め息を吐きながらも、この現実の中で生きていくことを決意した。

「そうと決まれば早くこの生活になれないとな。」

陵はとりあえず教えられたとおりに廊下を進み一応リビングとして使われているらしい部屋にたどり着いた。

その部屋には本棚が複数あり、所狭しと書物が並んでいる。

中央に机と椅子があるだけで他には何も見当たらない。

とりあえず本棚に目を走らせるが見たことのない文字が並んでいて読むことができない。

「あれ・・・おかしくないか？」

さっき俺は普通にこの世界の人たちと話していたよな・・・？

本棚の中から適当に本を抜き出して中を見た。

そこに書かれていたのは見たことのないはずの言語。

他の本を確かめてみるが、どれも同じような意味の分からない単語が並んでいる。

「これが・・・この世界の本当の言語なのか？」

おそらくこの世界で聞かされたことの中で一番の謎であろう言語に陵は頭を悩ませた。

多くの時間を使って陵がようやく答えにたどり着いた。

「そうだよ・・・異世界から来た俺に分かるはずがない。前に同じことがあったはずだからレティオさんに聞いてみよう。」

この疑問に関しては後回しにして他の部屋を見てまわることにした。

第４話　～夢～

気がつくと辺りは真っ暗だった。

自分の体だけが光の中に浮いている。

不思議と恐怖は感じない・・・いや、むしろ安心する・・・？

まるで今までの不安が吹き飛ぶような感じだ。

俺ひとりなのかと辺りを見渡すが闇の中なので何も見えない。

『・・・・・そこに居るのは誰？』

不意に後ろから誰かの言葉が聞こえて振り向く。

そこには俺の周りで発光している光と同じような光を纏った少年が居た。

少年は無邪気そうな笑顔で首を傾げていた。

俺は質問に答えようと口を開いた。だが紡がれた言葉は自分の予想とは違ったものだった。

「俺・・・俺は誰だろう・・・・・・。」

思い出せない・・・。俺は誰なんだろう・・・・・・。

俺は何かを言おうとしていたはずだ・・・。名前、年齢、所属・・・

・・・。

様々な自分を思い浮かべるが、どれもしっくりこない。

少年は面白いことを思いついたように笑った。

『・・・じゃあ君は何をするためにここに来たの？』

少年の言葉が俺の頭に響く。

「俺は・・・何をするために？」

そういえば俺は何かをしなければいけなかったはずだ。

でも一体・・・何をすればいいんだ。

確か・・・ここに来る前に色々あって・・・。

『色々って例えば？』

声に発したつもりはなかった。

でも少年は聞こえていた、とでも言うように質問を続けてきた。

『あなたは今まで何をしていたの？』

何って・・・家で起きて学校に行って・・・・・・。

『じゃあ、どうして君はここに居るの？』

どうして・・・って言われても俺には分からない。

そもそも俺は自分がどこに居るのかも分からない。

『そうだね気付いたらここに居たんだね。知ってるよ、君のことは・・・何でもね。』

少年が笑ったような気がして顔を見ようとするが上手く焦点が合ってくれない。

おかしいな・・・表情は感じることができるのに・・・・・・。

ぼやけてしか見えないはずの少年の顔が次第にハッキリしてくる。

『おや・・・もう時間のようだね・・・・・・。』

少年が俺の後ろを指差す。後ろには俺たちを包む光よりも強い輝きをもった光が存在していた。

その光の向こうから誰かを呼ぶ声が聞こえる。

その声に引き寄せられるように光が近付いていく。

二つの光の距離は次第に短くなっていく。

『また会えるといいね。』

その少年の顔を認識できたとき、俺の光ともう一つの光が一つになった。

その光に守られるように包まれながら俺は気を失った。

俺の意識は再び暗闇に運ばれていた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0424ba/

What connects bonds

2011年12月31日22時45分発行